

2022 年の内外石油情勢の展望と課題

<報告要旨>

一般財団法人 日本エネルギー経済研究所
石油情報センター 所長・研究理事
市原 秋男

本報告のポイント

1. コロナ禍からの経済回復に伴う原油需要の増加に対し、OPEC プラスの減産及び米国の生産量伸び悩みから需給逼迫感が高まり、2021 年は原油価格の上昇が続いた。油価の高止まりを背景に、米国や日本等は石油備蓄の放出を決定。他方、11 月下旬にはオミクロン株感染拡大でパンデミック悪化の懸念が急速に高まり油価が大幅に下落した。OPEC プラスは、12 月初旬に現行の毎月 40 万 b/d の増産を来年 1 月も継続することを決定
2. 2022 年の世界の石油需要は、パンデミックが極端に悪化しないとの前提で 2021 年比 430 万 b/d (4.4%) 増の 1 億 60 万 b/d、供給は OPEC プラスが増産自体は維持するという前提で同 510 万 b/d (5.4%) 増の 1 億 70 万 b/d と予測。
3. 国際原油 (Brent) 価格は、2022 年平均で \$70 と予測。但し、COVID パンデミック悪化、OPEC プラス減産再開は大きな不確実性。前者の影響で石油需要低迷の場合は、基準予測より原油価格は平均値で 10 ドル下落。後者の影響で需給タイト化の場合は、同平均値で 10 ドル上昇と予測する。
4. 脱炭素化の動きが一段と加速した状況下、石油業界にとっては、事業基盤の再構築と災害時や過疎地 SS を含めた安定供給体制の維持の並行的対応が求められる。

世界の石油需給

5. 2021 年第 3 四半期の需要は前年同期比 550 万 b/d (6.0%) 増の 9,760 万 b/d。世界的に COVID-19 パンデミックは収束していないが、経済再開に伴い需要回復が続いている。パンデミックが極端に悪化しないとの前提で、2022 年は 2021 年比 430 万 b/d (4.4%) 増の 1 億 60 万 b/d と予測。
6. 世界の石油生産は、2021 年第 3 四半期の生産量は前年同期比 540 万 b/d (5.9%) 増の 9,640 万 b/d。OPEC 増産及び米国生産量回復ペースは需要増加に追い付いていない。OPEC プラスがペースは鈍化しつつも増産自体は維持するという前提で、2022 年は前年比 510 万 b/d (5.4%) 増の 1 億 70 万

b/d と想定。

OPEC 及び主要国動向

7. OPEC プラスの 2021 年第 3 四半期の生産量は 4,940 万 b/d。12 月 2 日の会合で 1 月の増産維持を決定したが、COVID-19 パンデミック悪化等、需要減少への懸念は強い。
8. 米国の 2021 年第 3 四半期生産量は前年同期と同水準の 1,080 万 b/d。需要は同 180 万 b/d (9.8%) 増の 2,020 万 b/d と堅調。価格上昇に伴って生産量はようやく回復基調に。2022 年も生産量回復 (前年比約 100 万 b/d 増) は続き 2019 年水準を超えると想定。

在庫及び金融市場

9. OECD 商業在庫は、9 月では 27 億 3,720 万バレルと低水準で推移。11 月に米国主導で備蓄の協調放出を決定、米国は年内にも放出開始か。価格抑制効果は現時点では限定的と見られる。
10. IMF は、10 月、世界経済成長率を 2021 年+5.9%、2022 年+4.9%と見通し。7 月発表の見通しを、2021 年については小幅に下方修正。オミクロン株の影響等によるパンデミック悪化はマクロ経済成長率の大きな下振れリスク。
11. このところのコロナ禍からの経済回復を背景とした油価の上昇局面では、米国株価と油価との連動が見られる。2022 年中ともいわれる米国利上げやパンデミック悪化は株価にも影響し、リスク性資産からの資金流出も。

国内市場

12. 2021 年第 3 四半期の石油 (燃料油) 内需は月平均 1,214 万 kl (249 万 b/d) で前年同期比 1.3% (16 万 kl) 増 第 2 四半期需要 1,159 万 kl (240 万 b/d) から 4.5%増。製油所稼働率は 2021 年第 3 四半期 72%であった。
13. 国内石油製品市況は原油調達コスト (円建て原油輸入価格) に 2~3 週程度のタイムラグを伴いつつ追随している。
14. 脱炭素化の動きが一段と加速した状況下、石油業界にとっては、事業基盤の転換と災害時や過疎地 SS を含めた安定供給の維持の並行的対応が求められる。

以上